

中国語学習目的・意欲の変化に関する調査研究

保坂律子

Study of the purpose of taking Chinese classes of Japanese college students

Ritsuko HOSAKA

1. はじめに

70年代後半から始まった中国の改革開放政策による中国市場の開放や、アジア諸国の経済的躍進によって、人々の関心がアジアへ向かい始めた。それに伴い、中国語学習者は徐々に増加をたどることになった。その後89年の天安門事件の直後に、一時的に学習者数が落ち込むということがありはしたが、それもすぐに回復し、90年代に入ってから激増には驚くほどで、「中国語ブーム」や「中国語学習者の急増」が多く話題となったのは周知のとおりである⁽¹⁾。

しかし近年、もはや中国語は「ブーム」ではなく、大学の第二外国語の中でも一定の地位を得たと言える。学習者の増加は定着し、英語を除く外国語では、多くの大学で中、仏、独の順に選択される傾向が強まっている⁽²⁾。また、NHK テレビ、ラジオの中国語講座においても、英語に次ぐ規模の視聴者を獲得している⁽³⁾。このような状況下において、当然ながら大学での中国語教育の重要性は一層増し、それに応える効果的教育方法を明らかにすることは急務であろう。

本稿は、本年7月本学第二外国語中国語履修学生に行ったアンケート調査結果を、筆者が平成7年に首都圏8大学の第二外国語履修者411名を対象に行った先行調査結果と比較し、学習

目的をはじめとする意欲、取り組み姿勢等の変化を分析することにより、教育の現状を明らかにし、効果的教育を考える資とするものである。

2. 平成15年アンケート調査概要

平成15年7月に本学で行われた「授業アンケート」実施の際、同時に別紙に合計8項目のアンケートを作成し調査を行った。概要は下記のとおり。

2.1 調査時期および対象調査

時期：平成15年7月

調査対象：駒沢女子大学 第二外国語中国語履修学生

有効回答数：計200名(1年126名 2年74名)

2.2 調査項目と調査意図

調査項目と調査意図

調査項目は、以下に述べる観点から全8項目を設定した。各項目と調査意図を記す。

Q 1 中国語選択理由

アンケート調査の主たる目的である。選択理由を尋ねることで、中国語の学習目的がどこにあるのか把握する。また、学習意欲も探れるであろうことを期待する。

Q 2 選択の際、単位がとりやすいかどうか考慮したか

Q 1 と関連項目である。第二外国語が選択必

修科目である場合、単位の取得しやすい語学を選択する学生がいることは否めない。目的と意欲のより正確な把握、すなわち単位取得が選択の主目的となりうるのか、また単位を離れた学習意欲の有無の分析のために調査項目とした。

Q 3 中国語の目標レベル

目標とするレベルは、学習目的、意欲と相関が深いと判断してよい。一般に高いレベルを目標とするには、それなりの意欲を必要とするからである。本項目で学習目的と学習意欲を探る。

Q 4 教科書以外の教材利用（複数回答可）

学生が教科書以外の辞書や参考書、メディア使用、利用することは、金銭的あるいは時間的にも中国語学習に投資することであり、これは学習意欲、学習目的と相関がある。ここでは利用の実態を把握し、同時に教育効果を高める使用、利用方法を検討する参考とする。

Q 5 英語との学習比

一般に学習意欲を数値化し、客観的に示すことは難しい。仮に学習時間数を調査し、1時間が2時間に増えても意欲が2倍になったとはいえないだろう。そこで学習意欲を相対的に把握するため、外国語としてほぼ全員が学習している英語を比較の対象とし、学習比を問うことで、力の入れ方、意欲を探る尺度とする。

Q 6 希望する副教材

教科書以外に希望する副教材を調査することは、学生の興味是否存在と学習指向の把握に必要である。それを踏まえて教育方法を考えることは学習意欲を喚起し、教育効果を高めるのに有用である。

Q 7 学習開始後の中国語の印象

学習開始後の中国語の印象を調査することは、学習以前に持っていて学生の期待、予想がどのようなものであったかを知ることにつながる。また、その期待と予想とのギャップを把握することで、教育効果を高める指導法への改善などが見込まれる。

Q 8 学習継続予定

今後の学習継続予定を知ること、学習目的、学習意欲とこれまでの教育効果を知ることが出来る。以上8項目の調査意図をまとめたものが表1である。

2.3. 先行調査

筆者は今回と同様の調査を過去に実施している。その概要は下記のとおり。

調査時期：平成7年11月～12月

調査対象：首都圏8大学、第二外国語中国語履修学生⁽⁴⁾

有効回答数：411名

調査項目：12項目⁽⁵⁾

表1 調査項目と調査意図

調査意図	調査項目	学習目的	学習意欲	教育効果	指 向
Q 1 中国語選択理由		*	*		
Q 2 単位取得の難易		*	*		
Q 3 中国語の目標レベル		*	*		
Q 4 教科書以外に利用しているもの		*	*	*	
Q 5 英語との学習比			*		
Q 6 希望する副教材				*	*
Q 7 学習開始後の中国語の印象				*	
Q 8 学習継続予定			*	*	*

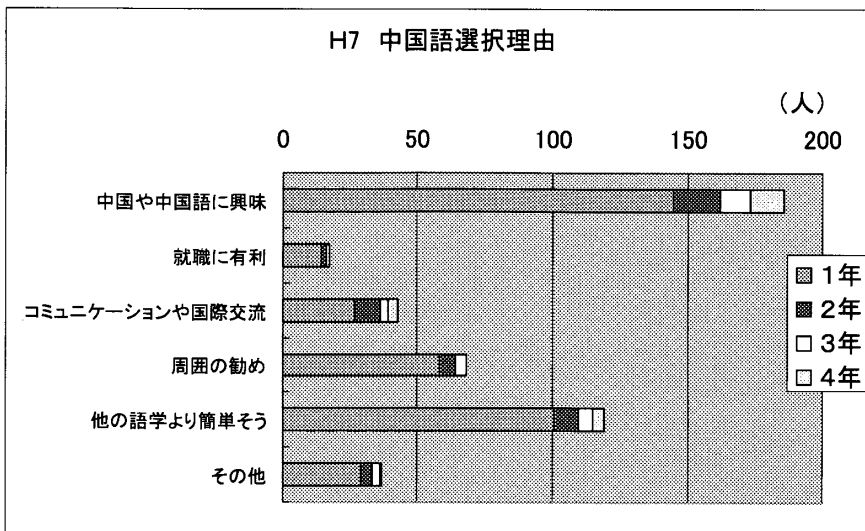
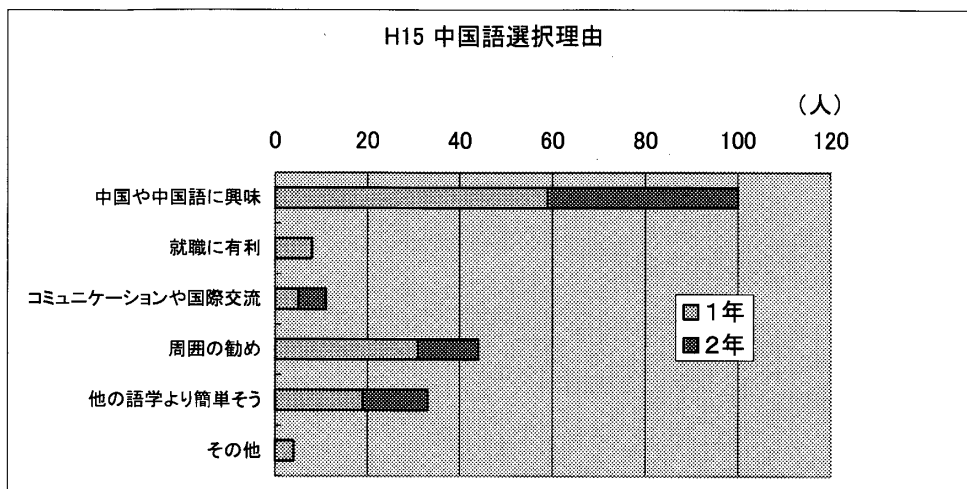
3. 調査結果の分析と考察

本章では、平成15年の調査結果を先行調査の結果と比較し、分析と考察を行う。

Q 1 中国語選択理由

今回の調査も平成7年の調査結果と同様、「中国や中国語に興味がある」ことを選択理由に挙げた学生が最も多い。特に今回の調査で目を引くのは、平成7年の調査と比べ、「他の語学より簡単そう」が大幅に減って、全体の15%になっ

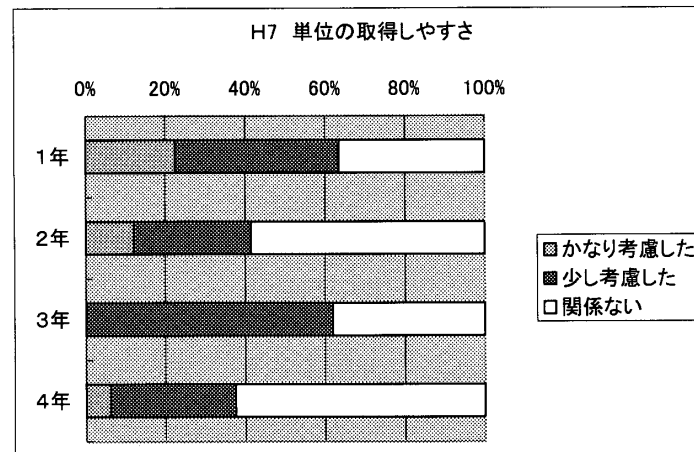
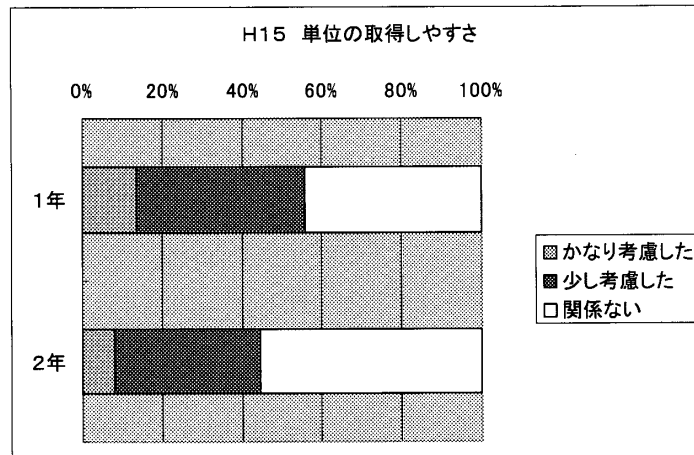
た点である。この結果は学習意欲が高まり、学習目的が明確になってきたことの表れとみることができる。逆に「周囲の勧め」の割合は増加している。具体的には「これからきっと役に立つ」という親からのアドバイスが多い。



Q 2 単位の取得しやすさ

今回の調査で、単位が取得しやすいかどうかを「かなり考慮した」1年生は15%、2年生では10%に満たず、平成7年の調査と比べるとその割合は半減している。もはや「単位の取得し

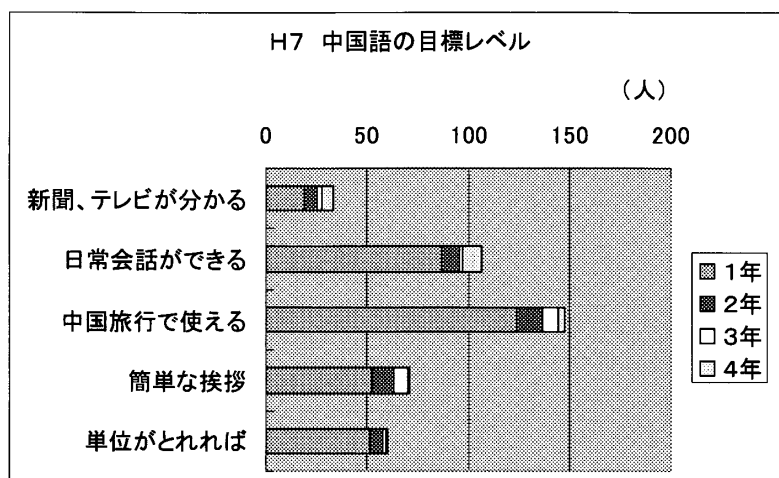
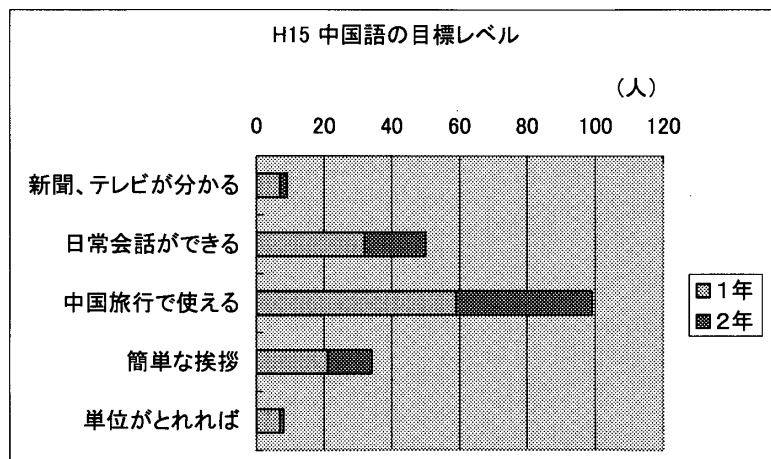
やすさ」は中国語選択の決め手ではないと言い切ってよい。中国語の学習意欲が高まり、前向きな選択姿勢であることがうかがえる。



Q 3 中国語の目標レベル

まず、今回の調査で、特筆すべき点をあげると「単位が取ればそれでよい」を選んだ学生が、前回と比べて激減したことである。今回「単位が取ればよい」を選んだ学生は1年生で7名、これは1年生全体の6%に過ぎず、2年生では何と1名であった。これは調査を行った教員に対し気を遣ったのかもしれないが、前回「単位が取ればよい」とした1年生が16パーセントだったのと比べても極めて低い。次に今回の本学の調査結果に限って見ると、1、2年生ともに「中国旅行で使える程度」が約半数を占める。これはQ 1の選択理由が「中国や中国語に興味」が多かったことから予想される結果であ

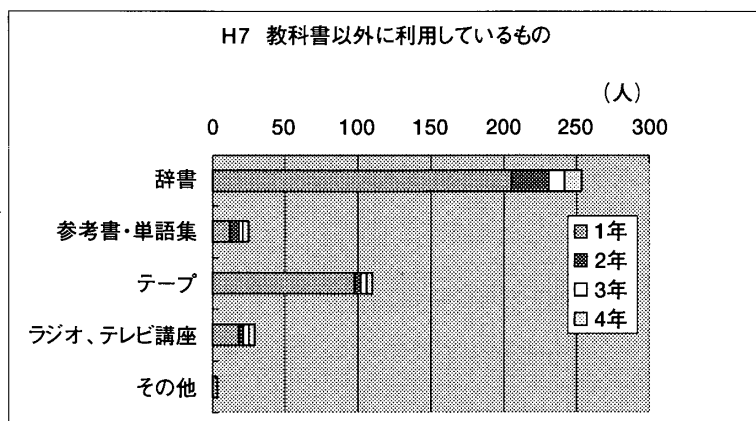
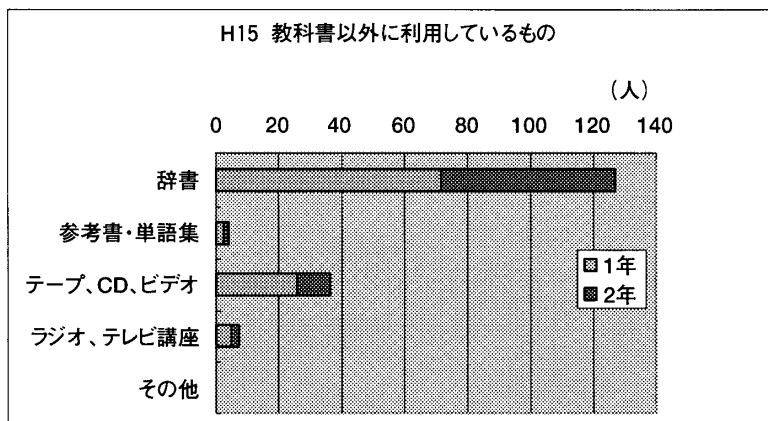
る。この語学レベルは、挨拶レベルからは卒業し、基本的な事項（時間、場所）の確認や、自分の意思（する、しない）等を伝えられるレベル。相手の配慮があれば、簡単な会話が成立つ。「日常会話ができる」は両学年とも約4分の1の学生を選んだ。この目標レベルは、簡単な日常会話や限定的場面での相互コミュニケーション能力を供えたレベル。「簡単な挨拶」は1、2年ともに約2割。また「新聞、テレビが理解できる」というレベルを目標とする学生は5パーセントに過ぎず、本学では1、2年の段階で目標を上級レベルに設定している学生は少ないことをうかがわせる結果である。



Q 4 教科書以外に利用しているもの

本学では1、2年とも辞書の利用が最も多い。1年生だけみると6割弱だが、2年生になると、約4分の3が利用している。平成7年の調査では、1年次に辞書を購入しない学生はそのまま買わずに済ませる傾向が強かった。今回の調査で2年生での利用が高かったのは、学習が進むにつれて学習意欲が高まったのかは定かではない。しかし以前は、教員の勧めにもかかわらず、「お金がないから辞書は買わない」という学生の声をよく聞いたが、昨今学生を取り巻く経済状態は依然としてよくない中、中国語学習には

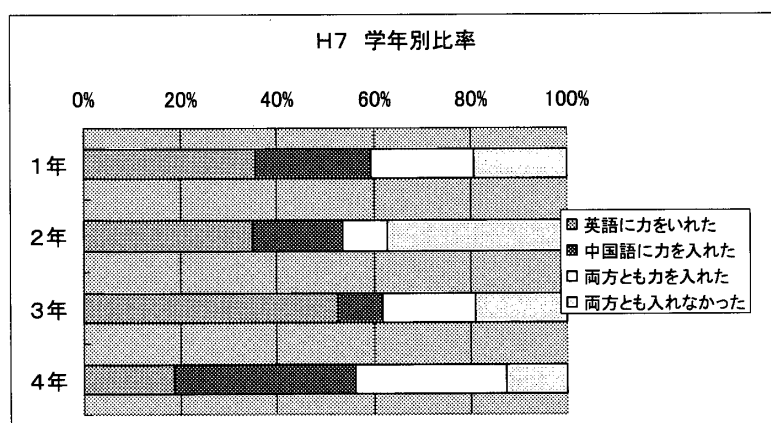
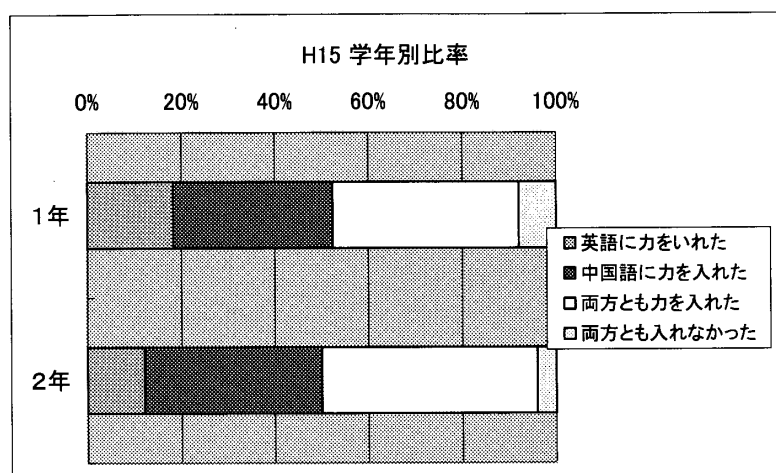
多少の出費を惜しまなくなった点は注目に値する。このほか「中国語のテープ、CD、ビデオなどの音声教材の利用は1年生で2割を越えている。これは入門時の発音練習のため、教科書に付属していることが多くなったCDの利用であると思われる。その証拠に、2年生では利用率が下がっている。前回の調査段階では、まだ教科書にCD付きはなく、テープも教員の好意でダビングしたものが多かったはずである。テレビ・ラジオ講座は教員の熱心な勧めにも関わらず、依然として利用率は低い。



Q 5 中国語と英語との学習比

この項目の調査結果には、平成7年の調査結果と有意な違いが見られる。平成7年では、英・中両言語の学習比では、「英語に力を入れた」が全学年で最も多かった。「中国語に力を入れた」、「英・中ともに力を入れた」を合わせても約半数であった。その結果と比べると、今回の調査では中国語に力を入れる学生の増加が顕著である。同時に、平成7年の調査では「両方とも力を入れなかった」学生は20%に達していた

が、今回は「両方とも力を入れなかった」、という語学学習に消極的な学生は5パーセントにも満たなかった。これらからは、中国語はもちろん、全面的に外国語学習には力を入れる傾向が強まっているといえる。今回の本学の調査では、英語との学習比については、1年生では「中国語に力を入れた」、「英・中ともに力を入れた」を合わせると4分の3以上を占め、同様に2年生では8割を超えている。

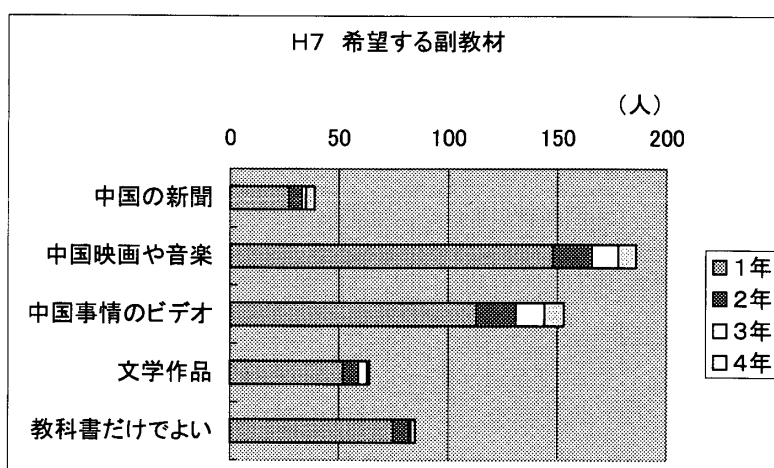
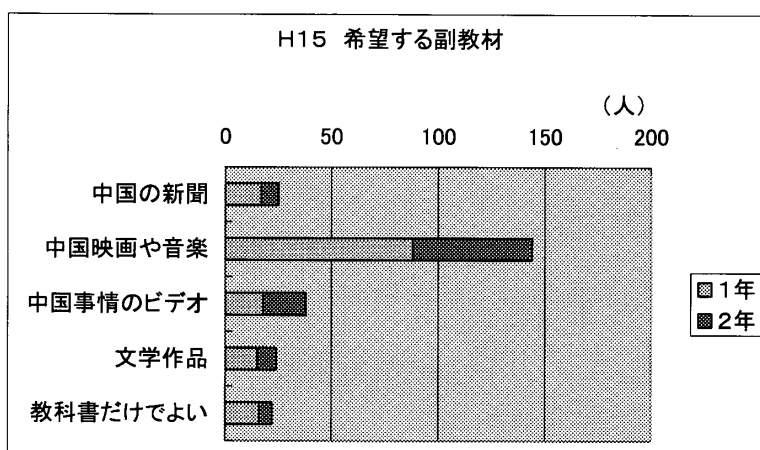


Q 6 希望する副教材（複数回答可）

今回の調査と前回とを比べて大きく異なるのは、希望する副教材として「中国事情のビデオ」が激減したことである。前は全学生の4割弱が「中国事情のビデオ」を希望したが、今回はその半分の2割であった。特に、1年生の減少が大きい。前は34%の希望があったが、今回は14%に留まっている。これは8年の間で、わざわざビデオに頼らなくても、かなりの学生が、テレビやインターネットをはじめ多くの媒体を通じ、中国事情を知りえるようになったからは

ないだろうか。決して学習意欲が減少したためではない。学習意欲が向上していることは、平成7年の調査では「教科書だけでよい」が2割だったのに対し、今回は全体の約1割に減少したことからも推測できよう。

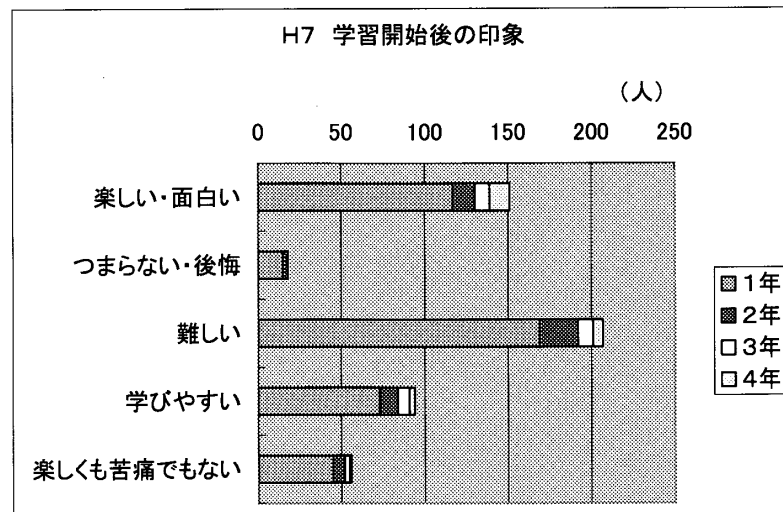
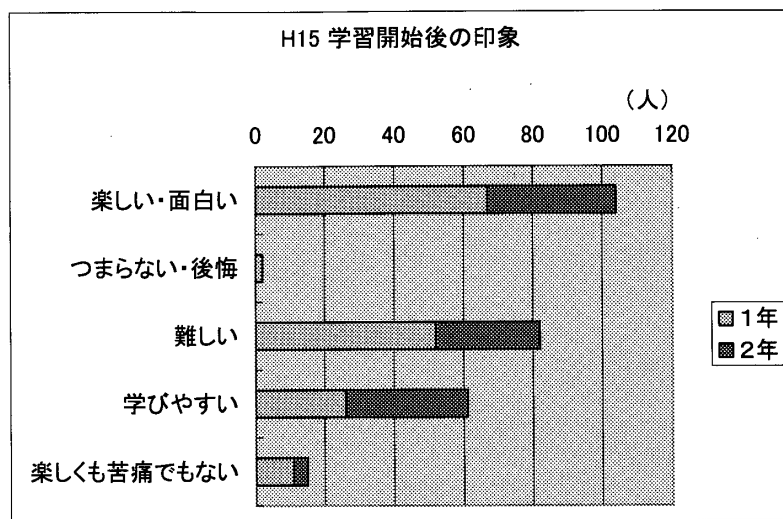
今回の調査では中国映画や音楽が群を抜いて多く、半数以上が学習したいものとしてあげた。前回の調査でも、中国映画や音楽を希望するのは約45%であり、今回と大きな差はなかった。



Q 7 中国語学習開始後の印象（複数回答可）

今回の調査では半数以上が「楽しい・面白い」との印象をもっている。これは前回の割合より15%ほど増加している。また今回「難しい」は4割であるが、前回は5割であった。「学びやすい」は今回は3割、前回23%で、若干増えている。「楽しくもなく、苦痛でもない」は今回8%、前回14%。これらの数字は今回の調査の対象が本学のみで、教員に配慮した可能性もある

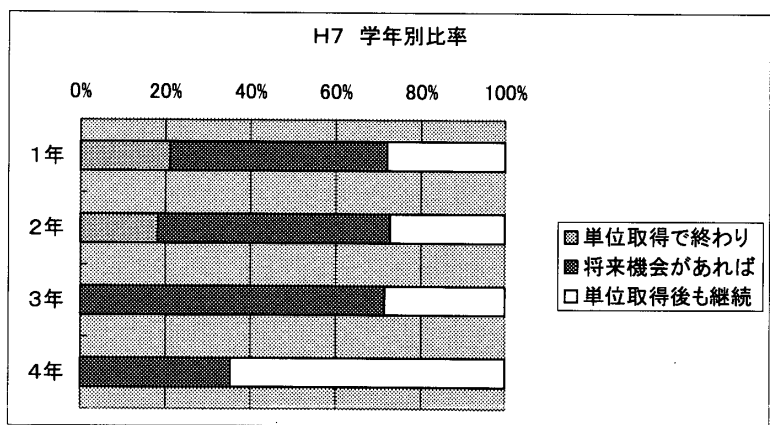
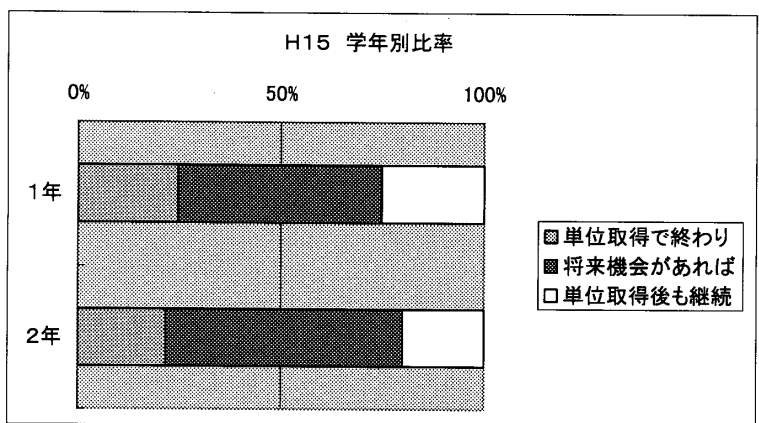
が、Q 1～Q 4の結果からも推測されるように、中国語学習の意欲や関心が高まり、自分の意思で選択するようになった結果「楽しい・面白い」が増えたのではないだろうか。また、日本語と同じ漢字を使うことから「学びやすく」もあるが、漢字を使うので易しいと思っていたが「思っていたより難しい」といった印象のようだ。



Q 8 今後の学習継続予定

今後の学習予定を「単位習得で終わり」とした学生は今回24%、前回18%である。大学卒業後「将来機会があれば」また勉強したい、という学生は最も多く、今回、前回ともに半数強である。大学で「単位取得も継続して学ぶ」という希望を持つ学生は今回24%、前回29%で、母数

の違いを考慮すると、おおざっぱな傾向は同じであろう。今後「将来機会があればまた学ぶ」という学生が多いことは、現在の教育が「学ぶ意欲を持ち続けさせる」点で、それなりの効果をあげているといえる。



4. 先行調査研究との比較からみた学習目的・意欲、意識の変化

平成7年に行った調査対象が8校411名だったのに対し、今回の調査対象は本学1校200名である。数の上では約半数、それも対象が1校であることから、2回の調査を同条件で比較することはできない。しかし、調査結果の比較分析からは、次のような中国語履修学生の学習目的、意欲および意識の変化傾向を指摘することができるであろう。

第一に、Q1～4の結果が示すように、学生は明確な学習目的をもって中国語を選択するようになり、目標とする中国語レベルの底辺が上がった。「単位がとればそれでいい」とする学生の割合は前回とくらべ1割以上減っており、自分の選択理由に見合う目標を設定している。今回の調査対象が本学のみであったことを差し引いても、有意な変化である。

第二に、中国語の学習意欲が高まっている。中国語に力を入れた学生、中国語英語ともに力を入れた学生の合計、すなわち中国語学習に力を入れた学生の割合が半数から4分の3へと増加した。また、中国語だけでなく、英語も共に力を入れた学生が増加している。その一方で、「英語・中国語ともに力を入れなかった」語学学習に消極的な学生は激減していることは、語学学習には力を入れる傾向が強まっていることが見て取れる。

第三に、学生の中国事情への理解が進んでいる。これは8年の間で、かなりの学生が、テレビやインターネットをはじめ多くの媒体を通じて、中国事情を知りえるようになったからであろう。

これらの学生の学習目的・意欲、意識の変化は、単にアジアの隣国である中国の経済的躍進や社会的発展に対する関心からだけではない。長引く日本の景気低迷や大学生の就職難から、

中国語をなんらかの形で活かしたい、役に立てたい、と考える学生が少なくないことも関係しているだろう。同時に、中国語選択理由に「周囲の勧め」として「親から就職に役立つと強く勧められた」ことをあげる学生も多く、周囲からも期待されていることが明らかになった。

5. 学習効果を高める教育方法

以上の調査分析をふまえ、第二外国語中国語教育として、学習効果を高める教育方法の提案をする。まず、第一に選択理由が「中国語や中国に対する興味」であることや「周囲の勧め」であることから、学習内容は少なくとも、教養教育としての文法と作文では適切ではない。語学学習を将来何らかの役に立てたい、生かしたいという学生の潜在的な要求に応え、かつ社会の期待にも沿う中国語は、自ら情報を収集し発信できるコミュニケーション能力である。特に、社会の趨勢を的確に把握し、自分の意思を表現できる力である。そのため、文法事項は盛り込みながらも、教材は今日の中国事情や社会の紹介を積極的に取り入れることが望ましい。教材研究はもちろん、マンネリにならないよう、コンピュータ支援による教育などを可能な限り取り入れ、学習意欲を喚起するような教育の実践を目指すべきである。また、第二外国語としての学習である以上、一般には学生は2年間で授業としての学習は終わる。学生が授業を離れても、一人で学習を継続できるように、辞書や参考書、書籍はもちろん、中国関連サイトの情報など、折にふれ提供することを心がけるべきであろう。

6. 結び

本稿では本学中国語履修学生へのアンケート調査を通じて選択理由、学習目的や意欲等を明らかにし、その上で平成7年度に行った先行調

査との比較分析を行った。その結果に基づき、中国語履修学生の学習目的・意欲、意識の変化等考察を行い、効果的な教育について初歩的な提案を行った。本稿は学生側への調査に基づくものだが、研究を意義あるものとし、より効果的な教育方法を考えるには、学生側だけでなく、教員側の意識、社会が期待する第二外国語像なども調査がなされることが望まれる。今後の課題である。

〔注〕

- (1) 中国語だけでなく、93年2月の日経流通新聞では「アジア系言語、“西欧”を逆転、中国・朝鮮語に人気」と報じ、中国語や朝鮮語だけでなく、ベトナム語の人気が急浮上してきたことが紹介されている。
- (2) 「日本の中国語教育」、日本中国語学会中国語ソフトアカデミズム検討委員会編、好文出版、(2002.3)による。
- (3) 同上
- (4) 対象学生の中に、3年生、4年生が少ない比率ながら含まれているのは、再履修の学生である。
- (5) 調査項目は、今回本学で行った8項目のほかに「授業で楽しいこと、つまらないこと」「授業の説明言語・形式・宿題」「検定試験」「検定受験理由」の4項目を加えた12項目であった。

〔参考文献〕

- 日本中国語学会中国語ソフトアカデミズム検討委員会編2002「日本の中国語教育」、好文出版
保坂律子1998「日本大学生汉语学习情况調査」、《世界漢語教学》、世界汉语教学学会（中国・北京）、1998年第2期、pp. 106-110
保坂律子1997「履修目的から考える中国語教育研究」—アンケート調査に見る履修の現状と教育方法の課題—『お茶の水女子大学人間文化研究科年報』、第二十号、pp. 76-86
毎日コミュニケーションズ編1995「全国事務系大学生・第二外国語選択状況調査結果